

## 現代詩のアテルイが放つ北上の詩想

佐相 憲一

はじめに 〈劇葉にご注意〉

この本は日本の詩歌の長い歴史の中で詩文学を愛し、現代の詩を真剣に考える私たちにとって、劇葉である。狭い枠の中でしか詩を見ない流れに対して、時代・社会・世界や庶民生活の状況に立ち入らない流れに対して、そういう流れに対して日頃誠実な違和感をもっている私たちのストレス症状に、ぐいっと強い力で人間本来の詩の叫びの方へと対処してくれる、真実の言葉の劇葉である。

それでいて、ご安心いただきたい。お説教をされる気分にはならないし、「劇葉（良葉）は口に苦し」ではなく、類まれな反骨ヒューマニスト齋藤彰吾氏の熱心で巧みな言葉に「劇葉は口に甘し」の快感さえ覚えるであろう。そして、この劇葉は死に至らしめるのではなく、逆に元気の源になる劇葉である。

わくわくドキドキのスリル、日本文化の価値観を原始の力で本来の多様性へと逆転してくれるような革命的な発想と、親しみやすいざっくばらんな語り口。

り返る。

〈泥寧と空つ風の街道、

—— 一月の街道

商店の幟旗は色褪せて

帆布のやうに捲れ上り、

その端が悲しい戦慄と流浪の歌をうたうてゐる。

（詩集『青い翼』・「街道」）

詩集と照合するすべもないが、私はこのような詩句に魅かれた。イメージが働きかけてくる郷土性に共感を覚えたのかも知れない。十代の後半だったから、ふるさとに生きることを探していたのだろうか。〉

啓示的な出会いである。この詩世界が内包する民衆生活と強烈なイメージは、素朴な北上青年を魅了しただけでなく、その後、青年自身が大きく飛躍して詩文学と地域文化の世界で展開していく運動の内実と共通のものを感ぜさせるのだ。その古本屋でこの民衆派の詩人と出会ったのは偶然だが、この青年の生き方と感じ方がこのような詩に感動してそこから出発したのは必然であった。

そして、驚くべきことに、その古本屋は〈高校の国語教

これはもう、「ついに出了た！」という感じの、現代詩を底から見直す長年の提言実践成果である。

さあ、愛すべき北上バルバロイ・アテルイの詩的な旅へと共に出発しよう。

詩人の素顔 〈一章〉

一章は劇葉を飲む前の胃葉のようなさざやかな自己紹介から始まる。

現代詩の分野で長く執筆してきた作者、北上文化界全体を巻き込んで地道な地域文学運動を推進してきた作者、誠実での確な批評で他者の詩や詩書などを論じて来た論客としての作者、戦争をはじめとする世界・社会の時事問題に敏感に反応して積極的に発言してきた作者、地域コミュニティで広く親しまれる文化人としての作者。

このようにいくつもの顔をもつ多忙な齋藤彰吾氏であるが、この本の冒頭には、素顔の詩人の初々しい出発点が語られている。

「初めての詩集―詩との出会い―」を見てみよう。作者は高校一年生であった。北上の古本屋で百田宗治の詩と出合う。その詩世界が新鮮で、ついにここに詩人の芽生えが生じたのであった。作者は百田宗治の詩を引用しながら振

師の居宅であることが分かった」というのだ。〈その先生から教室で薄赤い角川文庫を手渡される〉。それが石川啄木だったというのも印象深い。

〈高校は科目の自由選択制、のびのびと学んだ。詩の会、俳句会が毎月開かれる中、当時のクラスメートであり、のちに詩人となった高橋昭八郎、渡邊眞吾らと「蛭雪時代」などで入選した。これもこうした学校生活が醸出した結果である。〉

現在の学校教育から見ると、うらやましく豊かでのどかな様子である。

ここからうかがえる人間・齋藤彰吾氏の青年期の背景は、周囲に詩文学を愛する人々がいて、その人々は郷土を愛することと詩を愛することにおいて、美しい自然風土と共に、作者の精神世界の形成に強い肯定的影響を及ぼしたということだろう。そして、物質的な娯楽などの悪影響を受けずに生活の中で、物事を自分の頭で考え、試行錯誤しながら自分たちで文化活動をするという主体性を身につける土壌もあつたということだろう。

急激に「開発」されていく日本列島の東北の農村地帯で、中央集権的な国家政治経済機構の同化圧力が次々と郷土の

風景を変えていった激動の時代。「それはちよつとおかしいんじゃないか」という独自の反骨精神と、人々の生活の喜怒哀楽に親しむ郷土愛が育まれた。

そこから青年は、一方で学問を積んで自らの理論と実践へと踏み出していき、他方では夢中で文学創作の道へのめりこんでいくのであった。

この原点的なエッセイからこの本を始めたい。

一章ではこの後、宮沢賢治、サトウハチローという先達詩人について論じられている。この二人の組み合わせにも齋藤彰吾氏の世界を感じる。宮沢賢治の深い精神性とサトウハチローの良き大衆性。この双方が両立するところに齋藤氏独自の広さがあるのだ。

## 北上詩想の最前線 二章

二章はいよいよ北上詩想開陳である。冒頭の「残されている一・二のこと——同人詩誌「化外」の側面から——」は、作者たちの詩運動の形として一九七三年から一九八四年まで二十二号に渡って展開された詩誌「化外」のいきさつが記されている。

〈季刊同人詩誌「化外」を若手の伊藤盛信と語り合い、エゾ・エミシ論を掲げて岩手の地から創刊したのは一九七三年十月のこと。化外の会の当初は、相沢史郎、南川比呂史、佐藤秀昭、それに伊藤と私で、後に数人が同人になった。題字を画家の岩間正男に書いてもらい、二号からワラビ手刀を表紙に、十号から終刊二十二号（八十四年）まで悪路王の仮面を配した。仲間や読者から「化外」の意味を問われる。『律令』（岩波書店）では、くえがいのルビがあり『広辞苑』には「かがい・王化の及ばぬ所。教化の外。」で、仏教用語でもあるらしかった。十七号から題字の左上にKEGA Iと入れたりした。〉

壮大な構えと熱い気概である。伝統的な大和から見た「日本」ではなく、本州の東北部に先住民エミシの頃からあった「もうひとつの日本」の精神を現代に受け継ぐというのである。「化外」という詩誌タイトルも面白い。

そのような血気盛んな作者たちを応援してくれる著名な先達詩人がいた。山形を拠点に詩活動をしていた真壁仁である。真壁仁は齋藤氏の仲間である南川比呂史氏の詩集への祝辞の中で、次のような言葉を寄せてくれたのだ。

域語であり民衆言語である。それが、どんなに創造的でおもしろいものであるか。詩人はこういうことばの発掘者のことであり、その創造の可能性の継承者でもある。  
(以下四行略)

そのように共通の志をもつ詩人とも共同しながら、刺激を与えあい、詩運動は展開された。

その思いは次の対談「アテルイの後裔・化外」でも展開される。このタイトルには、古代日本国家に勇敢に抵抗しながらもだまされてほろぼされた先住異民族エミシのリーダー・アテルイの心を現代の詩運動に引き継ぐという壮大な詩想がはつきりと出ている、痛快だ。その反逆精神が、北上の風土を大切にすする真の郷土愛から生まれていることを強調したい。庶民を形成する農民、労働者、商人などが生活する現地での実感こもる言葉、自分たちの生きた言葉に誇りをもとうという精神が、「いなかもの」観をアテルイ的に打破していく詩想と結びついているのである。

方言などといういい方にはすでに中央意識がぶんぶんにおっている。あるのは村のことば、くらしのことば、あそびことば、はたらきことば、かくしことば、たとえことばなどなどである。これをひらきなおっていえば、地

で、方言学をやっていないんだね。」

(中略)

〈斎藤 本当はそうではなくて、体から出るもの、集落があつて村があつて、そこで生活者としての本音を吐くという場合には、方言は大事なんです。とにかく、まあ、音声言語、つまりわれわれが語るることによって、現在辛うじて生きている。〉

〈佐藤 エミシ的というのは、なんだ昔のことをやっているのじゃないかと思える所もあるんですけども、現代社会に対する風刺というものが一面にあると私は思っているのですが。〉

斎藤 でつかい事を言うと、ひとつの文明批判みたいなものにつながっていくわけですね。〉

次の「馬の国の領主」では、詩作品で北上の史実に迫り、それを自己分析している。

ここから二章はさらに踏み込んで、北上ゆかりの周囲の書き手の作品世界と生き方などを論じていく。

「相沢史郎の方言詩とラグビー」では、今も全国の詩の

場で活躍し、豊富な学識とぶつちやけた社会性で方言アヴァンギャルドの道を歩いている詩人・相沢史郎氏と作者が、学生時代に同じ北上でラグビーをしていたと書かれている。その後は「化外」でも共に書いていたという。後の北上名詩人二名の青年時代の接点がかがえて新鮮だ。

H氏賞受賞詩人としても知られ、名作詩集『動物哀歌』を世にのこして病でなくなった村上昭夫が「首輪」に参加していた頃の様子を記した文章や追悼文は村上詩のファンにとつても貴重で新鮮なものであろう。

若い頃から作者が共に時代を生きてきた小原麗子氏の作品世界や人物像、後年までの交流の記録などは、それぞれの時代背景や地域状況、若い人たちの文化活動の状況、生きる姿勢などへの貴重な考察を含んでいて熱い。

特に一九六七年に書かれたという「母と村の考察」は、北上の農家で育った当時の若き小原麗子氏の内面の真実にも迫りながら、新しい文化サークル的な詩運動をも切り拓いていく可能性について、連帯と共感の筆致でしかも冷静に批評して読みごたえがある。本書第四章で展開される生活語詩の先駆的な実践と言えよう。

続けて、香川弘夫、南川比呂史、高橋晃、高橋忠司、大坪孝二、栗木幸次郎、といった作者ゆかりの人々とその作品世界への真摯な言葉が並んでいる。

まさに、北上バルバロイ同志の誇りと、リーダーたるアテルイの総括、といった感じである。かんかんがくがくの論議を繰り返しながらじつくりと北上の地で取り組まれてきた長年の詩運動が、いまこうしてこの本にまとめて刻まれて広く伝えられるのである。

この章の最後は、こうした詩運動を展開してきた作者らを取り組み、目に見える成果として現在全国から利用されている北上の「日本現代詩歌文学館」についての文章「おらだずの詩歌学会」である。これもいい響きのタイトルだ。作者はこの公的な詩歌文学館に設立前から携わってきた一人であった。この文学館を利用している私たちはあらためてこの文章を読み、設立と運営の苦勞を共に労いたいものだ。

### 現代の岩手の詩の紹介 〈三章〉

三章は二〇〇四年に朝日新聞の岩手版に連載された「イハトーブの詩人たち」である。一月から七月まで二二回

にわたって現代の岩手に関係する書き手の新鮮な詩を紹介し、批評・案内している。そして同年九月にまとめた文章である一三回目が掲載された。各回のタイトルはそれぞれ以下のものである。「抒情に地の匂い立つ」「大地から湧く農の声」「時代へと響く方言詩」「人の世を包む野の花」「可能性を開く視覚詩」「親と子に潜む愛と魔」「花が彩る生気と鎮魂」「子どもの詩への信頼」「古代への記憶を刻む」「望郷に新しい響きが」「まことの言葉の姿へ」。このテーマの設定にも斎藤氏の人間性が表れていると言えよう。

ここで紹介された詩作品は新鮮である。斎藤氏の案内文に注目だ。これらが書かれたのはイラク戦争と世界の反戦非戦世論の時であり、それを反映した詩もしつかりと掲載されている。また、子どもたちの詩を論じる時の斎藤氏は実に楽しそうで、読んでいるこちらもうれしくなる。岩手の風物をよみこんだ作品群への批評が確かなことは言うまでもない。

この連載を読んでいくだけでも深い充実感が得られる。そして、それぞれの詩人の言葉と共に、案内役の斎藤氏の詩への愛情も心地よく伝わってくるのだ。世の中に広く詩というものを伝える視点がいい。

連載の最後に作者は味のある引用をしている。

〈読んでくださった読者や盛岡総局に感謝しながら、私の好きなアイルランドの大詩人（二十三年ノーベル文学賞）W・B・イエーツの一節を掲げ、終わりの言葉とします。〉

ああ、お願いする——どうか／ひとが頭だけで書くような詩に／私がおちこまないように／守ってほしい。／流汗を越えて残ってゆく詩とは／骨の髄で考えたもの——  
〔「老いた時への祈り」・加島祥造訳〕

### 生活語詩運動の先駆者 〈四章〉

昨今、京都の有馬敏氏らのイニシアチブで「生活語詩」の運動が盛んである。斎藤氏はその運動に積極的に参加している。また、方言を重視した詩の堤唱・実践という意味では、片岡文雄氏、島田陽子氏なども大きな功績を残してきた。そして、全国各地のさまざまな書き手がすぐれた「生活語詩」をずっと前から書いてきた。

その中で、北上でこの側面でも先駆的な仕事をしてきたのが斎藤氏であることが四章で分かる。

書かれたのは一九五九年、一九六〇年、一九七四年、一九八〇年、二〇〇九年である。続けて読むと、この作者

が人間の生きた生活の中で使っている日常言葉で詩を書くことをいかに一貫して主張してきたかが分かるだろう。その視点はすでに前の二章・三章でも明らかであった。この四章の各文からいくつか引用しよう。

〈そもそも北上詩の会が発足した目的はなんであったろうか。

それは大きくいえば三つある。一つは詩が大地ないし生命の所産であること。それを地理的に限ろうとすれば、北上地方ないし北上市に「生きている者」が「生きている状態・さま」を書きつづけていくこと。

二つは、「詩」は特定の人々に書く権利があるのではなく、万人のものであること。いうならば、市民のあらゆる職業の人々がここに結合し、「生活の顔」をもち、あらゆる「願い」をこめた詩の「開かれた広場」にしたこと。三つめは、前の二つの創造することを重視しながら「詩の鑑賞のトレーニング」を絶えずやっていくこと。つまり詩の創造と普及を同時に実践していくことに目的をおいていた。

〔北上詩の会のこと〕一九七四年〕

〈私はその夏、ずいぶん言葉のために苦しんだ。生れた

なることに注目したい。日本の詩の黄金地帯といわれる岩手の、地下水を形成しているのが子ども達だ。物を見る・感じる力を養うことは、将来の優れた科学者・宗教者・哲学者を生む基礎である。

〔子どもの伝言〕一九八六年〕

〈六十年安保後には農民詩誌「微塵」で、東北の生活記録と詩を混ぜ合わせることを考えたりした。そのことから松永伍一の『日本農民詩史』戦後編では、芸術派に対し私や小原麗子が生活派と呼ばれたこともあった。

〔『現代生活語・ロマン詩選』のこと〕二〇〇九年〕

いま、生活語詩に関心のある読者で、この先駆者の言葉に共感する向きも多いのではないだろうか。

### 北上文化を深く探求する

〈五章・劇薬対談など〉

五章はこの本にとつていずれの章の血肉も支える重要な「骨」に当たる内容だ。ここでは、詩文学の世界で北上にこだわってきた作者が、広く北上の文化全体を見つめて、

時から使っていた東北弁を、東京弁とか標準語に訂正しようとしたところで、生れは争われぬ。ずいしよで誰かとびでる。固有名詞を言う場合にも、マが棒のようにいる。歯切れが悪くテキパキといかない。いわゆるズーズー弁という奴だ。できるだけアチラ弁にまやかして、乗りこえてはきたものの気疲れには参ってしまった。ただ東北の連中が部屋にいたので、朝夕ふるさといるような気持ちになることは不足なかった。東北の連中と言っても、六県の多士才々であったので、おりおり微妙な語音には聞き返す始末であった。

〔「沈下しているもの・浮んでいるもの」〕一九五九年〕

〈私はその可能性を信ずるがゆえに提案する。〉

①あらゆる集会、あらゆる個人的な交流において、東北弁ないしふるさと言葉を思い切つて使うことにしよう。

②笑われても軽蔑されても、このことをかたくなに守り、東北弁ないしふるさと言葉に生き生きと血を通わせる工夫をしよう。

〔同右〕

〈子ども達の心からの叫びは、時代々々の証言や記録と

そのさまざまな細部を詳述している。直接、詩そのものを論じているのではないが、結局ここに熱く展開された北上文化論の本質が、作者の詩文学の考え方に反映しているという根幹的なものだと思う。また、作者の人格を形成した風土的背景を語っているとも言えよう。

章冒頭の対談「地域文化論・北上文化——沢藤礼次郎氏らとの対談——」は、この本のハイライトの一つと言ってもいいであろう。劇薬であると同時に、北上を愛する思いを共有する人々とのざっくばらんな対談には本音がよく出ていて、読み物としても抜群の面白さがある。これが北上の郷土誌「共存共栄」での対談だということも驚きだ。このような反骨の文化論をまちの雑誌に載せるというのはすごい。対談は一九七四年というから、世の中が革新的だった時代だからこそその空気かもしれないが、本当のことを本音で語る批判精神が公的な場で鈍らされることの多いこの国で、今これを読む新鮮さをきつと多くの読者と共有できるであろう。飛ばし読みしてほしくない必読の対談である。子ども時代の思い出話から始めて、地域文化のあれこれが生き生きと語られる。そして、北上や岩手の風土と集落の人間生活の関係、など文化論へと高められていく。そこから話は歴史に及び、北上と東北の古代史における

そして、この章には北上の文化・自然・先人などについてのそれぞれに詳しい論考が掲載されており、総じてよき北上案内になっている。齋藤氏の学識の豊かさが發揮された貴重な記録である。

その中に、「心のオアシス—おもいで花巻—」という、ほつとさせる文章がある。「花巻の伯母」をめぐる優しい思い出が淡い抒情を醸し出して、詩的な余韻がひろがっている。

### まだまだあるびつくり箱 〈六・七章〉

ここまででも十分すぐれた仕事の集大成であるが、ここからもうひとひろがり、いや、ふたひろがりの先があるのが驚きだ。

六章には、子どもをめぐるさまざまな考察、絵本、高校生短歌、図書館運動、読書会など齋藤彰吾氏のさらなる側面が豊かにひろがっている。なるほど、図書館で働いてきた作者ならではの突っ込んだ考察は説得力があるし、この人は本当に人間が好きなんだということが、子どもた

真実を語り合うところは特に痛快だ。教科書で、平安朝国家が坂上田村麻呂を東北に派遣して日本統一への道をひらいたという角度で教えられる古代史を、自らが暮らす東北・北上の原住民、殺され、同化させられた、もしかしたら異民族（バルバロイ）だった人々の文化をも深層とする側からひっくり返そうというのである。そして、それを現代の北上文化運動に生かそうというのである。いなかを下等なものとして支配する傾向の国の政治経済文化システムにも辛辣な皮肉が効いていて、対談当時の権力者への風刺が鋭い。手なずけられるからくりの暴露には詩にも通じる眼力を感じる。

ともすると現代詩の世界でも、こうしたバルバロイ反逆の視点は忘れられがちになる昨今であるから、意識の高い読者諸氏にこの本で齋藤氏と仲間たちの声を通して投げかけられるものは、すぐれて二十一世紀の課題でもあろう。日本社会におけるアイヌや琉球や在日コリアンへの関心はようやく高まってきた。しかし、東北や大和や日本海側の各地、九州各地などの古代原住民・異民族のことは日本の歴史から抹消される傾向が続き、謎に包まれてもいるから、東北・北上でアテルイやバルバロイの視点を現代詩想に生かしてきた齋藤彰吾氏の仕事は、きわめて先駆的であるとさえいえる。

ちや若者に寄せる温かいまなざしの中に感じられる。

北上の生活の中に詩運動を置いてきた作者は、こうして図書館運動や地域住民、子どもたちとの日常的・人生的対話交流を詩運動と結び付けてきたのだということが分かる。作者の文化活動がいかにもひろい世界をつくりだしてきたかが分かるだろう。

ついに、「天才バカボン」論（「道化役のリアリティ」）までとびだして、思わず拍手してしまう。そう言えば、齋藤彰吾氏自身がどこかとぼけた「バカボンのパパ」風の趣がある。逆転の発想と人間平等の心だ。

さらに七章「ミュージック・プロムナード」があつて、これは意外性のビッグヒットと言える隠しだまのようなとっておきの章である。

面白さ抜群であり、大衆音楽評論家としての齋藤氏の才能がここに輝いている。日本の各地の民謡、ロシア民謡、中学校校歌、流行歌、などをその歌詞を中心に独自の角度で新鮮に案内する中に、戦争や労働や思想やエピソードなどが織り交ぜられており、ここにも作者の時代を見つめる確かな批評眼が感じられる。

現代ミュージシャン姫神との共演までとびだすとは想定外のひろがりがある。ここにもあるのであつた。

## 詩の世界にかえる（第八章）

こうして、類まれな北上バルバロイ詩想の詩人による、あの手この手の多彩な論考をたっぷりと読んできて、最後の第八章までたどり着いた。

この本の最後はやはり現代詩の世界にかえって、書評群としたい。他者の詩業への斎藤氏の誠実な批評をここにも刻印しよう。

### おわりに

現代詩のアテルイ、斎藤彰吾氏の詩論集。

偉大なるエミシンのリーダー・アテルイは古代国家権力にだまされて志なかばで倒れたが、こちらの北上アテルイ詩人は現代詩や地域社会で今も精力的に活躍中である。

激動の二十世紀を生きぬいて、語って、闘って、励まして、微笑んできた人の詩想をここにお届けする。

表紙カバーに美しい北上風景の写真がある。「皆さん、行ってみてください」などと観光会社や議員「視察」旅行

のように安易に言ったらアテルイさんに生まれそうだが、この本で知った本当の北上の心に共感した方は、ぜひひょこつとエコロジカルに旅していただきたい。日本現代詩歌文学館も歓迎してくれるだろう。そして、旅人として佇みながら、花巻の宮沢賢治、盛岡の石川啄木、などと共に、北上の斎藤彰吾氏の詩想を思い返してみてもほしい。「そうか、ここか」という実感が生まれるかもしれない。

この本を読めば、心の景色は北上。劇薬が心地よく効いてきて、詩作品と詩運動、詩文化と歴史風土、逆転の発想と積極的な行動、地域文化と民衆の輪、戦争批判と世の中への提言、さまざま文化論、などを内包する壮大な詩想に読み手の心も解放されるようである。

真なるバルバロイの詩想。それはきつと二十一世紀の進歩の方向。原始古代から現代を通して人類が詩的に見つけた共生の願い。それを二十世紀から書いてきた斎藤彰吾氏に敬意を表する。

この貴重な本が、北上の地域文化社会でも、日本の現代詩の世界でも、これからの文化文学一般の場でも、広く生かされることを願っている。

中央に従わない、まつろわぬ民、東北の蝦夷の心を胸に詩を視つめてきた齋藤彰吾の全体像に迫る論考だ。それも戦後すぐからざっと六十年にわたる詩作活動から導きだした膨大な論考群。いずれも東北・岩手に暮らしてきた「生活詩人」の情熱が一貫して流れている。この十年近くかなり親しく交友させていただいている私にしても、その全貌は今回の詩論やエッセーで初めて知ることができた。

## 1 「化外」の思想

齋藤彰吾を語るには王権の強化の外を意味する「化外」の思想を抜きに語れない。朝日新聞記者だった私が、北海道釧路支局から岩手県北上支局に異動してきたのが二〇〇一年。そこで初めて齋藤彰吾という詩人の大きな軌跡を知ったのだ。いわば東北自治国の未裔である誇りから出発して、日本史に東北を位置づけようとした季刊同人詩誌「化外」を一九七三年に伊藤盛信さんと創刊（終刊

二十二号、一九八四年）。さらに一九八八年には東北学研究誌「北天塾」を『千通の軍事郵便』などを世に送り出したことで知られる菊池敬一さんと創刊。「北天塾」は一九九九年の第十号で休刊しているが、ここで副塾頭を務めていた。そうした硬派の詩人であることは、仕事柄、まもなく知ることになった。

その「北天塾」の「巻頭言」をみると、北天塾は終刊した「化外」の思想を色濃く受けていることが、みてとれる。そして、彰吾さん（ふだんそう呼んでいるので）が一貫して、この立場から、東北を、日本を、世界を視つめてきたことがうかがえる。その「巻頭言」を示す。

「北天塾」の願いは、北の天地に生きた人びとの過去と現在の姿をみつめて東北学をおこすことにより、次の時代への展望を確かなものにしようとするものであります。日本政治文化の歩みは、古来より大陸の中華思想の影響を受け、その南蛮・北菝の思想がそのまま熊襲・蝦夷におきかえられて施策されてきました。中央行政府を離れた地方ほど化外の地とされ、そこには文化が存在しないかのような考え方だったのであります。文化とは、普遍的にして個性豊かなものでなければなりません（略）深い土着志向が、世界に通じ、宇宙にまで通じる

ものであったことは、私たちの先哲宮沢賢治がみせてくれた如くであります」（「北天塾」巻頭言）

今回の論考では「地域文化論・北上文化」で代議士を務めた沢藤礼次郎らとの対談で、彰吾さんが、なぜ「化外」にこだわったか、その理由が明らかにされている。もともとは奄美大島に暮らしていた作家・島尾敏雄の新聞での発言から構想されたのだという。

彰吾さんは対談でこう語っている。「島尾敏雄の見方は）東北にしても、琉球にしても征伐された歴史しがなく、この二つの弧は日本の動向の中でついに主流になったことがないという見方なんです。その見方に共感し勇気づけられて始めたのが『化外』だったんです」。

私が北上に着任したその年に、同市の「鬼の館」で企画展「エミシ展〜北の鬼の復権〜」が始まった。翌二〇〇二年が征夷大將軍・坂上田村麻呂と果敢に戦い抜いた古代東北の蝦夷の英雄・アテルイの没後一二〇〇年にあたっていた。その記念すべき年に向け、いかに東北が歴史的にねじ曲げられて伝えられてきたかを鮮やかに示す企画だった。こうした試みをストレートに打ち出せる風土が東北・岩手にはある。これらを可能にしたのも、地下水脈を保ち続けた彰吾さんらの土台づくりがあったからだろう。

「日清戦争から第二次大戦に至る間の岩手や東北は、まさしく兵馬の供給地であった。その強いられた歴史の真実を、ぼくたちは凝視しなければならない」

こう結ぶ論考「馬をめぐる幻視の古代」も、「化外」の思想上にある彰吾さん独特の切り取り方だ。

第二次大戦では農民兵士の供給地であっただけに、今も東北・岩手は戦争の記憶がさまざま形で残されている、いや、残そうとする人たちがいる。北上市では、たった一人の息子に戦死された貧しい母親が苦勞して、苦勞して貯めたお金で道端に「南無阿弥陀仏」とだけ彫った墓を建て、亡くなっている。その墓を「意志の墓」だとして、命日（十一月四日）に母子を供養する「千三忌」を毎年、開いている詩人たちがいる。それも二〇一〇年で二十六回を数えた。同市に暮らし、「麗ら舎読書会」を主宰し、千三の墓守を自負する詩人・小原麗子さんは、その典型だ。

その小原さんに関する詳細な論考「母と村の考察——生活詩における小原麗子の側面」では、「日本に数少ない、女の記録者、詩を創造の淵とする書き手」と結んでいる。小原さんはもちろん、彰吾さんも、戦争に対するというか、反戦の意志は首尾一貫している。今回の論考にはないが、

多くの反戦詩を作品にしたり、紹介したりする膨大な仕事を続けているのも、もうひとつの顔だ。岩波新書『戦没農民兵士の手紙』（岩手県農村文化懇談会編）づくりにもかかわってきたのも、その延長線にあるのは、言うまでもない。

## 2 イーハトープの詩人たち

現代の暴挙である米軍のイラク戦争にも、敏感に反応した数少ない詩人のひとり彰吾さんだ。この戦争に怒る「平和と春一番を呼ぶ会」が北上川河畔の展勝地レストハウスで開かれたのは二〇〇三年冬だった。そのとき、私は思わず走り書きのようにして書いていた詩「怒りの苦さまた青さ」のメモを手会場に向かった。

詩らしきものを書いたのは、学生時代以来、およそ三十年ぶり。そのとき彰吾さんにおだてられたのがきっかけになり、「北上詩の会」や「岩手県詩人クラブ」、岩手県の詩人を中心にした詩誌「堅香子<sup>かたかこ</sup>」の会員や同人になることになった（二期だが、季刊詩誌「新・現代詩」の同人同士にも）。いわば私にとって、彰吾さんは詩の世界の水先案内人のようなものだ。

そうこうするうちに「朝日新聞岩手版で戦後の岩手県の連載中に知人から「元気をもらった」というメールが届いたのを機に、私も紙面の「記者メール」という小欄で、この詩を改めて紹介したほどだった。

新聞記者をしながら、詩を書き始めた私にとっては、意義のある仕事として、毎回、緊張しながらだが、楽しく仕事をさせていたのだ。自分が最初の読者である、こうした企画を組めたことは記者冥利でもあった。

だが、当の彰吾さんは大変だったと思う。その思いは今回の論考「まことの言葉の姿へイーハトープの詩人たち——」でみることができる。

私も直接、聞いたことがあるが、彰吾さんが心がけていたことのひとつは「作品には、一、二行だけでいい、読者の今の胸中をゆすぶる詩句を提供したかった」ということだった。「そんな気持ちだけが、やたらに働いていたことを思う」とも書いている。私にとってよかったのは、彰吾さんがこの連載について、「私にとっては、ある種の社会参加だった」と、思っていてくれたことだ。こうした「仕事上」の交友も含めて、詩の先輩・後輩とさせていたのだ。そのため、厚かましくも私の第一詩集『怒りの苦さまた青さ 詩論「反戦詩」とその世界』（二〇〇四年九

月）に「哀しみを抱き未来までへ——黒川純の詩について——」の小論をお願いした。

この小論も今回の論考にあるが、彰吾さんの「反戦の詩を書く行為」についての構えは、一朝一夕で生まれたものではないことが、わかるだろう。

「反戦の詩を書く行為は、鉢巻きを締めて書くことではない。ごく当たり前な一人の人間として、『不都合なこととは不都合だ』と、つまりご飯を食べるように書くことだ。巧く書くとかを求めず、今日のうちに消えてしまってもよろしいと、人びとの表情に告げる二言、三言を書くのみである。千人であれ一人であれ、読まれて個々の胸内に明かりがともる。それがこの国をつくる未来までへの、われらの任務であり希望ではないのか」（哀しみを抱き、未来までへ）

斎藤彰吾は「化外」の思想を根っ子に東北の風土にすくと立ち続け、「化外」や「北天塾」などの発行に立ち会い、今、「全国生活詩の会」編集委員会代表の一人として、方言詩、生活詩に力を尽くしている。さらに地元新聞店発行の「週刊きたかみ」にコラム「詩歌春秋」を連載しており、これが「別冊おなご」（麗ら舎読書会、年一回刊）に「戦

詩人たちを紹介してみたらどうか」。その名前も「風土」という北上市内の居酒屋さんで飲んでいた最中だと思うが、彰吾さんに持ちかけた。その当時、彰吾さんが戦後間もなく「岩手県詩人クラブ」の設立に強くかかわっていたことも知り始めたときだ。

主題を「イーハトープの詩人たち」と決め、各回ともテーマ主義でいくことにした。掲載は毎月二回、計十三回（二〇〇四年春〜秋）。とりあげる詩は現役の詩人に限ることにしたのが特徴かもしれない。そのテーマから岩手の詩の今がよくわかるはずだった。

初回の「抒情に地の匂い立つ」に始まり、「大地から湧く農の声」「時代へと響く方言詩」へ。「風土に吹く縄文の風」「古代への記憶を刻む」など。前出の小原麗子の「十七歳」などのほか、相澤史郎、城戸朱里、岩田宏ら全国で活躍する岩手県にゆかりがある詩人もとりあげられた。

そのうち岩手県宮古詩人クラブ・グループ「風」の詩をとりあげた「浜に吹く女の反戦歌」では、最初の読者である私も新鮮な驚きを覚えた。その詩、「伝えたいこと」（本堂裕美子）の四連目はこうだった。



争を読む」として長期の連載がなされている。それでいて、ときに野田宇太郎生誕祭献詩第一席に選ばれる魅力的な抒情詩も生み出しもいる。

これらの仕事を背景に生み出された今回のさまざまな論考は、戦後から現代を見据える拠点としてきた「化外」の思想、あるいはバルバロイ（異民族）の視点から、中央にモノ申すことに恐れない反骨のバトスのなせるものだと思ふ。「われらの任務と希望」を呼びかけた真摯な強い意志は、そうした齋藤彰吾のそれまで積み上げた結晶が呼びかけさせたものだ。「化外」から紡いできた風土の詩人の自負でもあるが、その指摘は反骨の詩人たちに対する大きな励ましにもなっている。

イラン・イラク戦争（一九八〇—一九八八年）のころ、仕事で度々バグダッドに行きました。あるとき、私の勤務する会社の会長から頼まれた与党の代議士が「紹介状」をバグダッド日本大使館宛に書いてくれました。仕事そのものは何ら大使館に助けを求めようような性格のものではありませんでした。が大使館の方では気にしている様子でした。献金で繋がっている二人の顔を立てると共に大使館にも安堵いただくため、「一つだけですがイラクの歴史に詳しい方に博物館の案内を」と、お願いしました。そういうことがあって、大使館のH氏にバグダッド博物館を案内していただくことになりました。

楔形文字粘土板の前に来たとき、一枚瀬戸物のように光る粘土板がありましたので、「これには何が記されているのですか」と質問しました。氏は「これですか？ここで待つように」と言って姿を消しました。しばらくして学芸員と共に現れ、アラビア語で話をしていました。それが終わると、私に説明してくれました。「記されている楔形文字

の語るところは、紀元前二〇〇〇年頃のメソポタミア、一人の母親の言葉です。彼女は初夜権の名の下に王の凌辱をうけた娘に対して言います。――泣いて暮らしますか。それともあなたの意識にあなたの存在を決定させますか――と」

行きずりの一人の民間人に対して、かくもゆきとどいた説明をする、その分け隔てのなさど訳文に見られる哲理、知識と理解に圧倒され、頭を下げました。

あれから二十年、いまはアメリカに占領されているイラクを思つて絵を描きました。砂塵の中を行く母と娘の絵ができました。

二〇〇八年七月、故郷北上市のアーケード街で路上展と称して道端に絵を立て掛けておりましたところ「絵について話を聞きたい」という人がみえました。

その方は「齋藤です」と云い、私は「三浦です」と言いました。その翌日、齋藤さんから一冊の本を頂きました。それは『新・現代詩詩人集2004』という詩と評論の本でした。

二十ページほど読んでいくと鶴見俊輔が出てきます。鶴見俊輔は「世界の大きな勢力に同調するんだったら、身銭を切つて雑誌を出す値打ちはない。（中略）詩学があれば、

時代と対抗できる思想をつくることができる」と述べています。おお！と読み進みました。

そうすると、本の中ほどに齋藤彰吾詩「バビロンの羊」がでてきました。そして作者の簡単な紹介がありました。それは齋藤彰吾一九三二年生まれ、新日本文学会、日本現代詩人会、「ベン・ベ・ロコ」、詩集「榛の木と夜明け」、「イーハトーボの太陽」、絵本「なりくんのだんぼーる」というものです。

詩「バビロンの羊」と私の絵の舞台は同じメソポタミアです。齋藤さんはそこに興味をもったのでしょうか。私はわたくしで、詩の世界を絵にしてみたいと思いました。

絵を描くについては先ず「バビロンの羊」のみならず、齋藤彰吾の他の詩や詩論も読んでおいたほうがよいのではないか、しかし、それは膨大な量に上ります。その前に、詩に対する普通の高校生程度の教養は持っていたほうがよいのではないか、高校生向けの参考書を買つてきて勉強しようとも思いましたが、めんどろです。勉強は止めよう。齋藤さんの話を聞けばよいと思いました。私は年に十数日、故郷北上に帰ります。そこで、齋藤さんに、夜の酒場に出てきていただいでお話を聞かせて下さいとお願いしました。

「バビロンの羊」については、ネブカドネツアル王から

はじまつて、ギルガメシュ叙事詩、ハムラビ法典、ブリュイゲルの絵やユダヤ人のバビロン捕囚、チグリス川、ユーフラテス川、古代の戦争と自然破壊などの話がありました。ある夜は、詩歌文学史をザーとなぞるような話がありました。子規と鉄幹です。日本の伝統的な詩歌の考え方は、自然の描写のなかに心情をからませることにあるようです。子規は心情がらみの技巧に偏りすぎた和歌や俳句を批判して写生を言い、それが散文にも行く。鉄幹が怒つて写生だけのどがおもしろい、浪漫あつてこそその詩歌ではないかと、自我を唱えたあたり、絵画における写真、写意、印象、抽象などとかさなる話でした。

あるときは、現代詩における韻律について「奴隷の韻律」という話。またある晩は、賢治、周五郎とルナール、ドーデの雰囲気について推理が展開されました。本人を前にして、生意気にも感想を述べたこともありま

す。齋藤彰吾「お医者さんごっこ」という詩があります。その詩の中に「ちいさな」という連体詞がでてきます。その詩とは「背後から／あまずっぱいものが／かぶさつてきた／くるりとでんぐり返り／向き合うと／能面みたいな／おかつぱの目に引力をかんじた／手にしていた木こぶのちゅうしんきは／どこかへとんでしまった／はなどはながくつ

つく／額とでんびがおしあう／おっぱいはどこ／かあさんのちうちをすったところ／うすべにいるの／ちいさなちくびに口をあて（中略）」というものです。「ちいさい」ではないだろうな、やはり「ちいさな」だろうなと思います。この詩は「鹿踊りが近づいてくる／ザンズクザンズク／ザツツアカザツツアカ／天竺から 岩がくずれかかるとも／心静かに 遊べ友だち 遊べ友だち」で終わっています。

ある晩、齋藤さんから蝦夷（えぞ・えみし）の話を聞いていました。「三浦さん、南もだが、北はひどいね」エツ？「ま、都からみた南北だけど」ハイ「南の熊襲、隼人はまだ人だけど北は蝦夷、虫偏だからね」ハアハイ「漢代かな、北の方には烏孫とか匈奴とか鮮卑ですよ。これもあまり上等な名前ではありませんね」エエハイ「ギリシヤ人の言うバルバロイも北ですね」ハイ「バルバロイを翻訳したらどうなりますか？」と訊かれました。

私は、エミシと同じ蛮族とでも訳しますかねと申し上げました。しかしエミシもバルバロイも歴史上の言葉でしょうから翻訳することは必ずしも適当ではないように思いました。それで、高校時代に世界史の菅原孝先生から聴いた話をしました。

菅原先生はバルバロイを解説して「バルバロイ barbaroi

うものですが、「とにか」と言われるとわからなくなりますが。「AとにかB」とは、言わざるを得ないAではあるがAだけでは足りない。Bがあるということであろうか。とすれば、「誇りと敬いというA」以外に「B」があることとなります。「B」とはなんだろう。正確な「B」は聞かなければわかりません。ただ、「B」の背景を想像することはできます。

西の山々 和賀川 北上川 咲く花 降る雪

北上の大地と空 風 林檎と塩引

物言わぬエミシのいたところ

風景の中に「メゲとムジエ」という言葉が浮かびます。子どもころ大人は「メゲとかムジエ」と言っていました。「B」が「めげ（めんこい・愛らしい）」と「むじえ（無情ゆえに哀しいまたは無常）」であるかどうか、それは私の勝手な想像ですからわかりません。——しかし——

コレハサゲツコノ妄想ガモスレネ ダドモ齋藤サンノ  
「詩」読ムド メゲドモムジエグナル ソステ「詩論（ハ  
ナスコ）」聞クド 生マレダドゴムジエドモメゴグナル

（これは酒の妄想かもしれない。しかし齋藤さんの「詩」を読むと、なにか可愛いのが可哀そうになる。そして「詩論

とはヘレネス Hellenes に対する語であって、ギリシヤ市民が北方の人々を軽蔑して呼んだ野蛮人、無教養な人々、外国人、異邦人といった意味であり、英語の barbarian の語源となった言葉である。そしてもともとは『聞きなれない言葉を話す人々』という意味である」と話しはじめました。さらに「アレクサンダーはギリシヤの北方マケドニアの出身であり、彼の言葉には強い訛があった。こうした場合、人は劣等感を抱きそうなものであるが彼は違っていた。彼はバルバロイであることを良性に意識していた。そのことが、エジプト、メソポタミアからインドに至る占領地において、各地の文化宗教習慣を尊重する治世につながったのである。その結果として、諸民族はよくアレクサンダーの教化するところとなったのである」と教えてくれました。「そうか、言葉だな」と齋藤さんは言い「言葉というか、民族だから言語だな」「けんかするからな」「西も東も」「英語もアラビア語も」「エミシでもバルバロイでも蛮族でも良いんだが、それはあちらからみた歴史だ。だってこちらでも黙ることはない。エミシの真実、バルバロイの真実、蛮族の真実を語るべきじゃないか」そして、「誇りというか」「うやまううううか」と言って話は終わりました。「誇りというか・うやまうううか」とはどういうことだろうか。「誇り」は己に「敬い」は他に向か

（話）を聞くと故郷は悲しくも愉しげに見えてくる。

「バビロンの羊」の絵は、ベニア板六枚になりました。宮大工棟梁八重樫正和氏が屏風仕立にして下さいました。二〇〇九年十二月、妻の木版画と私の絵という合同の展覧会で、その絵を発表しました。展覧会を後援して下さいました。北上市教育委員会の高橋一臣教育長にも気に入っていただきました。教育委員会の方々も齋藤さんと私との相談となり、絵は北上市に寄贈されました。

今年の春も故郷北上に帰る予定です。そのときはまた、齋藤さんに電話したいと思っています。そして、グラスを手で詩の話を聞きたいと思っています。

齋藤彰吾さんの付き合いは長い。もつとも同じ年生まれであるから、厳密にいえばその頃町に一つあった私立の幼稚園時代からの知り合いといつていい。しかし、当時は「男女七歳にして席を同じうせず」の時代であるから、小学校も高学年は男女別々であった。実際はあの大戦後の学生改革により男女共学が実地されてからのことであり、それも高校時代も後半になってからその存在を認識する程度のものであったように思う。

そして、彼は高校時代はラグビー部にも一度は席を置いたことがあるとのことだったが、私が知る限りでは、もう文芸部として高橋昭八郎や渡辺眞吾といった面々と作品を会誌に発表するなどの部活動を盛んに行っていて、私のように運動部で毎日コートを駆け巡って真っ黒に日焼けしている者からは遠い存在であった。

正直、あまり縁もないと思われた彼の存在だったが、驚いたことに社会人になって職場が同じになったことだった。二、三年遠回りして入った市立図書館で彼は教育委員会

からやってきて同僚となる。

昭和二十九年、北上市市政施行の時であった。

この時新築成った市立図書館は、新制北上市の最初の建造物であり、初代の館長は元・岩手県社会教育課長で、市政を待つ黒沢尻町から強い要望を受けて赴任した教育長佐々木修であった。

戦後、岩手県教育委員会に席を置きGHQなどと深く接触した体験を持つ佐々木修は、日本の社会教育行政に大いなる意欲を持っていたのであった。

それまでの一般的な図書館のイメージは、役場の裏側にある日の当たらない部屋とか、学校の一番端にある教室とかの、静かといえば静かであるが、中身と共にメーンからは遠のいた印象をもつものが殆どであった。

新館建築の構想中から、館長職には退職校長や役人OBからの自薦他薦などによる希望者が多かった、と洩れ聞いていた。しかし、新しい社会教育の分野に強い構想をもっていた佐々木修はこれに応ぜず、新生市の繁雑な業務を抱える教育長という重責を百も承知の上で敢えて館長職を兼任し、新しい図書館づくりの実施に踏み切ったのであった。

新装成った北上市立図書館は、それまでのこの周辺では類を見ない斬新的なものだった。まず当然のことながら建物は独立家屋である。今ならごく当たり前のことだが、当

時は図書館ごときが、といった風潮の世相にあって、文教地区の中に、ハイカラなテラスを備えた総ガラス張りといつていい壁面を持つ青い屋根の建造物は市民の目を見晴らせるに充分だった。

豊かな採光のもとに提示される図書は、わずか三千冊にしか過ぎなかったが、それまでの殆どの図書館が行っていた閉架式ではなく、すべてがオープンに提示される開架式である。今までカードによって検索されて提示される図書館資料が、目の前に全部提示されている新鮮さに来館した市民は歓声をあげたのだった。

この新館開館のニュースによって県内外の関係者からの見学が相次いだ。

かつての県教委時代の同僚も皆祝賀に来館したが、そのなかの一人が「かつての社教課長のやるせない夢が実つて……」と感慨深く述懐していたのが記憶に残る。

余談であるが、この建物に隣接する高校の生徒や市民のなかには、普段はあまり利用することもないけれども、卒業写真とか友達同士の記念写真にこのテラスなどを背景にすることが多く、一つ名所？になっていったという。

さて、館長佐々木修はこの業務に配属する職員にも若手を起用した。

結果的には三人全部が二十歳台の同級生という職員構成

だった。一町七ヶ村の合併による市制施行は、財政的にも非常に苦しいとされるなかでの、館長の情熱と努力による成果だったといえるとしても非常に希有なことだった。

そして齋藤省吾<sup>\*</sup>のこの配属は、詰めていえばその後の文化活動の基となり、その生涯を左右する文芸人としての道筋を辿る第一歩を記す門出であると考えられるのである。勿論高校時代から培ってきた詩作に対する才能とか、文芸全般に関する洞察力の確かさとかの感覚の素晴らしさを持ち合わせてはいるが、彼は決して器用人ではない。環境によっては或いはそれが損なわれるかも知れない危惧性もまた否めないものがあることも長年の付き合いのなかから感じるのである。

彼の持てる才能はこの環境の中にあつて、敢えて言わせていただければ、本来の天性の資質をさらに磨き上げる全くの好機の間であったことを思うのである。そして彼のこの才能を素早く感知し、この場を与えた佐々木修の炯眼に、今更のように敬意の念を抱かずにはおられないのである。

先に述べたように、蔵書わずか三千冊の図書館は新市の財政難の中から新館建築に要した莫大な費用の煽りを受け、その後の数年間は、ろくな備品費も図書費もつかない有様だった。今思えば理不尽な話であるが、当時の市財政は有

無をいわせぬ逼迫状態であったことも確かであった。

この情勢のなかで斎藤省吾の力量が遺憾なく発揮されることになる。各種読書会の結成である。青年会、婦人会、学校・PTAなど、各職場グループ、主婦たちのサークル、趣味同好会、ETC……。

少ない蔵書を利用して多くの読書会が生まれて、彼の指導によりそれぞれが活発な活動を行っていた。

児童文学の分野にも彼の視野が鋭く行き届き、自身が「なりくんのだんぼー」などの絵本を出版するなどの傍ら、作家同士の付きあいのなかから次々と児童文学者を囲む会や講演会が催されていつて市民の好評を博した。

このような多くの読書会が活動する中から統括する必要性が請われ誕生したのが「北上読書団体連絡協議会」である。そしてこれを母体に、当時の首長に説得を重ね移動図書館車の実現に漕ぎ着けたのであった。

昭和三十一年に結成されたこの会は、五六年を経た現在でも形を変えて、一般家庭からの不要の図書類を集めて「古本市」を開き、その益金で大型活字本を図書館に寄付するなどの活動を続けている。

このように佐々木修の意図する所を最もよく受け継ぎ、北上市の黎明期に果たした斎藤省吾の図書館業務の足跡は見事に実を結んだと言っている。

そして、それは元県社会教育課長の「やるせない夢」が一つの結実をみた証になる、ともいえるのではないだろうか。

その後も職場は北上市民会館に移っても、彼の行く所、初心の「市民と共に新しい社会教育を目指して」の精神はいつもその底流にあったといえる。

長い人生にあつて、多くの人との出会いを思う時、その邂逅の不思議さが天の采配としか思えない事例が多くある。初代館長佐々木修との出会いがまさしくこのことであり、常に大所高所から物事を見据え、高邁な精神をもって事に当たることを初めにたたき込んでくれたことをしみじみ思う。

この珠玉のような恩恵を抱いて、当時の職員はそれぞれの道を歩んできたことを今改めて痛感するのみである。

そしてこの恩に繋がり斎藤省吾さんとの長い付き合いがあったことを思い、ともに感謝しながらこのご縁にあやかっていきたいと念ずる次第である。

\*斎藤彰吾氏の本名は「省吾」である。

「あ、海だ。海だなあ、おど(父)さん!」

——よろこびと驚き、その同時性のさげび声を張りあげるようにして、人混みをかきわけながら珊瑚橋の欄干へ、川波の見える方へと走りよって行く男の子のうしろ姿……。

夏、八月。

北上市恒例の北上川打ち上げ花火の、ある一瞬の明るさと、どよめき。宵闇のもとで刻まれた声の、このイメージが半世紀も過ぎて今なお、ぼくの中で生きつづけている不思議。

幻のような、ひととき。この思い出が、その後、わが齋藤彰吾について語ろうとするたびに、何故か生きいきとよみがえってくる。

彼が第十五回野田宇太郎献詩賞(全国公募による)を受賞した二〇〇三年の秋、福岡をまわり、ぼくの住んでいる唐津へ立ち寄ってくれた際、大切にかかえてきてくれたB全判サイズのポスターも北上川の流れを中心にしたダイナミックなものだった。いわゆる観光ポスターではあるが、遠景には展勝地の桜並木、前九年の役を偲ぼせる陳ヶ丘を

配して「川は流れる 街のなかを 人のなかを……」などのコピーがあつて迫力充分の構図。これは、今もぼくの居間に掲げられている。(この広告は齋藤の制作によるものではない。念のため)

さて、わが齋藤彰吾はこの川岸で生まれ、育った。中学生の頃には考古学者になることを夢みて、縄文土器の破片などを探し歩いたり、古墳や古代住居跡の発掘などを試みるサークル活動にも熱心だった。その一方で、ぼくのような不良仲間の誘惑にのり、やくざのような仁義の切り方を練習したり、——スリルと多忙の明け暮れ。が、やがて自らの駿足を生かしたラグビーへ転向し、同時に詩作を開始。その後のエネルギーシユな文芸活動へとひろがる彼のスタートラインをまざぐることになる。

このたびの『真なるバルバロイの詩想』は、いわゆる詩集ではないけれども、一九五三年から二〇一〇年にわたる、およそ六十年間の、詩人としての彼の一貫した営為がプリズムを屈折する色彩のように、詩論・文化論集としてのこの一冊に映し出されている。

いわゆる東北地方の歴史／文化への強い問いかけを底流に光源体としての彼の活動は、詩集『榛の木と夜明け』(一九五七・装幀Ⅱ大宮政郎・発行ⅡLaの会)、『イーハトーボの太陽』一九八一・装幀Ⅱ大宮政郎・発行Ⅱ青磁社)などにも、すでに多くの陰影をとどめていた。

齋藤彰吾の語り口については、村野四郎は当時、次のように書いている。

「この詩人は、妙なレアリティの創り出す特殊な方法を心得ている。一応自然主義的で且つ散文的な心象造型の手法をとっているように見えるが、そのメタファは完全に詩的である。そしてこのスカラベサクレのように見える人間の、ある時は尊大で、ある時は実に惨めな、その恰好が喜劇的なベイスンでよく描かれている。」(詩集『榛の木と夜明け』広告用DM／これは、雑誌「詩学」誌上からの再録)

この、彼独得の語り口は今回の詩論・エッセイ集にも生きていて、読者を東北／北上の歴史と風土・言葉の根源へと、引きこんでしまう。

惜しまれるとすれば、詩誌「首輪」の創刊と終刊までの事情、岩手県詩人クラブの発足と歩みにかかわる彼の思惑、詩劇の上演、「新日本文学」、「人民文学」、作家大西巨人氏との出会い、そして詩誌「列島」、「日本未来派」との交流、アパッシュの会主催による「20世紀芸術への発言」Ⅱ映画の中の民衆(報告Ⅱ齋藤彰吾)などなどの記録、内実／報告の欠落であるかもしれない。

これらについての新たな書きおろしを望むのは、読者の

ひとりとして、次の機会を待ちたいと思うからである。

ここでは、ぼくも現場に立ち合っていた、ひとつの事件! を記しておきたい。

一九七一年、秋。北上市芳町の寿座(劇場／映画館)を会場にして「寺山修司の講演と映画の会」が開催されたときのことである。演題は「現代青春論」。場内はすでに満員、若者たちの熱気にあふれていた。

寺山が演壇に現われ、いよいよ、話しはじめようとして、開口一番、唐突に「齋藤彰吾、出てこい!!……」と、さげびながらコーラの空き瓶を客席へ向かって投げつけたのである。場内は一瞬、静まりかえったが、齋藤彰吾の不在を知ると、寺山はやがて何事もなかったように客席へ対して話し始めたのだった。

当の齋藤は、たとえば、あいにく風邪気味で一日中、自宅で寝込んでいたのだという。

これも、まさに〈絵〉のような話である。このときから、すでに四十年もの時が流れた。

二〇一〇年、いま、寺山と齋藤の詩碑は、その攻／守を変えるようにして、北上市内の橋本児童公園(芳町)Ⅱ寺山、展勝地陣ヶ丘(立花)Ⅱ齋藤、に建ち、北上川の流れに耳を澄ましている。